

氏 名： 柴 邦代

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：看甲第5号

学位授与年月日：平成25年3月20日

学位授与の要件：学位規則第15条第1項該当

論文題目：小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動に関する研究

－尺度開発と関連要因の検討－

学位審査委員：主査 大津 廣子

副査 山口 桂子

副査 柳澤 理子

副査 小松万喜子

副査 岡本 和士

論文内容の要旨

I 序章

小児看護学実習における教授活動では、発達途上にあり幅広い年齢の小児を受け持つという対象の特性、小児との接触経験が乏しいまま実習に臨むことの少ない学生の特性等に対応する必要がある、学生が実習目標を達成できるようにする為には、教員が学生と患児との関係形成を支援する教授活動を効果的に展開する必要がある。小児看護学実習における学生と患児との関係形成についての先行研究(西田・北島, 2003 ; 小口・関, 2002他)からは、患児との関係形成が学生にとって重大な課題であり、教員は学生と患児との関係性に焦点をあてた教授活動を展開していることが確認できた。しかし、小児看護学実習での関係形成を支援する教授活動が適切に行われているかを評価する測定用具として利用できる既存尺度は見当たらず、小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動の実態や関連要因も明らかにされていないことが確認された。そこで、小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動を測定する尺度を作成し、それをを用いて、学生と患児との関係形成を支援する教授活動の実態と関連要因の検討を行うことにした。

II 研究の目的と意義

小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の評価用具となる尺度を作成し、その尺度を用いて小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の実態と関連要因を明らかにすることを研究目的とした。本研究で作成をめざす尺度は、看護教員が教授活動の自己評価に用いることで、教授活動の質向上に役立つと考える。また、小児看護学実習における関係形成に関連した教授活動の測定が必要な研究にも活用できると考える。

III 研究の枠組み

本研究における「教授活動」とは、学習目標達成（実習では実習目標達成）をめざす学生の主体的・能動的な学習活動を促進する為に教員が行う行動をいう。また「小児看護学実習」とは、健康障害をもつ子どもの看護を受け持ち制で行う小児病棟での臨地実習を意味する。更に「学生と患児との関係形成」とは、《受け持ち患児との融和化》と《融和化による関係性の成熟》をコアカテゴリーとする2つの段階からなるプロセスをいい、「患児との融和」とは、受け持ち開始当初に見られた学生に対する警戒心を示す反応が患児に見られなくなり、学生が患児に接近することやケアすることを患児から受け入れられるようになった状態を表す。

IV 小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度の作成

研究目的は、小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の評価用具となる尺度を作成することである。

研究方法は質問紙調査（自記式無記名式、回答方法は7段階評定法によるリッカート法、郵送法）、尺度作成に関する本調査の内容は、①「小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動」55項目、②基準関連妥当性確認用項目：教授活動自己評価尺度－看護学実習用36項目、③教員の基本属性に関する質問項目18項目とし、再テストには上記①②を用いた。

調査時期は、本調査を平成23年8月～11月、再テストは平成23年10月～12月（本調査の返信から概ね3週間後）に実施した。

調査対象は、全国の看護系大学（短期大学を含む）・3年課程看護専門学校で小児看護学実習を担当する教員とし、施設責任者の承諾が得られた304施設に所属する449名に質問紙を配布、再テストでは、協力に同意の得られた278名に質問紙を配布した。倫理的配慮として、愛知県立大学の研究倫理審査委員会において承認を得て、研究を実施した。

結果、本調査では372名から回答が得られ（回収率82.9%）、尺度構成の段階では尺度作成の為の質問項目55項目に欠損値のある32名を除いた340名を分析対象とした（有効回答率91.4%）。小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動の「介入必要性に関する判断」「教育的介入」の2つの構成概念から作成した項目について探索的因子分析を行い、因子負荷量.35以上の4因子42項目（第1因子15項目・第2因子11項目・第3因子10項目・第4因子6項目）を「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」として確定、各因子を下位尺度とし「介入アセスメント」「ケア行動円滑化支援」「接近行動促進支援」「言語的コミュニケーション支援」と命名した。

信頼性検討では、IT 関連で「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」全体の Cronbach' s α = .946、4下位尺度では.802～.929と高い値であったことから内的整合性が確認された。また、再テスト法による安定性の検討でも、本調査と再テストの尺度合計得点間には $r = .829$ ($p < .01$) の有意な相関がみられ、下位尺度得点間でも.724～.800の有意な相関が認められ、安定性が確認された。妥当性検討では、質問紙作成段階での専門家会議により内的妥当性・表面妥当性が確認され、「教授活動自己評価尺度 - 看護学実習用 (SCTB)」を外的基準とした併存的妥当性検討で「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」と SCTB の尺度合計得点間に $r = .711$ ($p < .01$) の有意な高い相関がみられ、基準関連妥当性が確認された。

以上より、信頼性・妥当性の確認された「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」4下位尺度42項目が作成された。

V 小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動と関連要因

研究目的は、小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の実態と関連要因を明らかにすることである。

研究方法は、質問紙調査（自記式無記名式、回答方法は7段階評定法によるリッカート法、郵送法）、調査内容は、①小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度42項目（IVで作成した尺度項目）、②実習指導環境に関する18項目、③小児看護学実習での指導に対する教員の困難感15項目および自信15項目、④教員の属性に関する18項目で構成された。調査時期、調査対象、倫理的配慮はIVと同様の為、省略する。

分析方法として、実態については記述統計量の確認を行い、関連要因の検討は、①属性要因、実習指導環境要因、困難感・自信を独立変数とする一元配置分散分析およびBonferroni法による多重比較と、②属性要因、実習指導環境要因、困難感および自信との相関分析（量的変数にはPearsonの積率相関係数、質的変数にはSpearmanの順位相関係数・点双列相関係数、相関比）、③重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。

結果、小児看護学実習関係形成支援教授活動の実態では、尺度合計得点の平均値は250.31（1項目あたり5.96）で、項目別得点の平均値および標準偏差は7段階評定の 4.30 ± 1.50 ～ 6.63 ± 0.69 の間にあり、評定中央値4.00より高値に偏っていたことから、小児看護学実習関係形成支援教授活動は概ね適切に行われていることが確認された。4下位尺度の各合計得点の平均値を比較したところ、「言語的コミュニケーション支援」が他の下位尺度より特に低かった。また、尺度合計得点が特に低い低得点群（平均値－1標準偏差未満：226点未満）の特徴が確認された。

関連要因の検討では、属性要因（個人属性、教育キャリア・研修等）、実習指導環境要因（実習指導体制、学生および受け持ち患児に関する項目）、実習指導に対する教員の困難感・自信を独立変数、「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」の尺度合計得点を従属変数とした重回帰分析で「小児看護学実習での指導に対する自信（ $\beta = .330$ ）」「1日あたりの指導時間数（ $\beta = .226$ ）」「小児看護学実習指導に対する教員の困難感（ $\beta = -.196$ ）」「希望による小児看護学実習担当（ $\beta = .127$ ）」の4変数が抽出され、関連要因であることが確認された。しかし、調整済み決定係数 R^2 は.342と低く、別の関連要因の存在が示唆された。

以上より、「小児看護学実習での指導に対する自信」「1日あたりの指導時間数」「小児看護学実習指導に対する教員の困難感」「希望による小児看護学実習担当」の4要因が小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動と関連することが明らかになった。

VI 全体的考察と今後の展望

本研究で開発された尺度は、教育経験の浅い教員や小児看護臨床経験の乏しい教員が実習指導を行う際に、教授活動や自己評価に活用することで、“学生と患児との関係形成”を促進する有効な教授-学習活動を展開することに役立つと考える。今後は、利便性を考慮した簡易版の開発が課題である。

論文審査結果の要旨

本論文は、小児看護学実習に臨む学生と患児との関係形成支援に着目し、その教授活動を測定する尺度の作成と、関係形成支援の教授活動に関連する要因を明らかにすることを目的とした研究である。看護学実習における教授活動の先行研究では、小児看護学実習における学生と患児との関係形成支援に着目した研究は少なく、その教授活動の評価用具として活用可能な尺度の開発は独創性が認められる。

本論文は二つの研究より構成されている。研究1では、看護学実習や小児看護学実習における教授活動、教授活動に関する尺度、影響要因に関する多くの先行研究を丁寧に検討し、「小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動」を測定するための尺度作成に適切に活用されている。尺度作成のプロセスは、項目分析、探索的因子分析、項目合計相関、信頼性係数による内的整合性の確認、再テスト法による安定性の確認、専門家会議による内容妥当性と表面妥当性の確認、併存的基準として SCTB を用いて基準関連妥当性の検討を行うなど適切なプロセスで実施されており、その結果信頼性・妥当性が確認された尺度を開発できている。研究2では、作成した尺度を使用し小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の実態を分析し、言語的コミュニケーション支援の実施が、介入アセスメント、ケア行動円滑化支援、接近行動促進支援よりも低いことが明らかにされた。また、関係形成支援の教授活動に関連する要因の分析では、小児看護学実習での指導に対する自信、1日あたりの指導時間数、実習指導に対する教員の困難感、小児看護学実習担当希望の要因が確認された。このことより小児看護学実習の指導に対して困難感が高い教員が参照できる教授活動の指針の提供や、教員の指導意欲を促進するための支援体制、指導時間が十分確保できる指導体制の整備などの必要性が示唆された。以上より本研究結果は、今後の小児看護学実習指導における教授活動の質向上に貢献できるものであり、小児看護学実習指導を担当する教員の指導指針となるガイドライン作成に向けた発展性のある結果であるといえる。

公開最終試験では、審査委員から尺度合計得点を用いた3群比較の群分けの考え方についてや、因子分析の際の因子負荷量を0.35以上とした考えについて、下位尺度の構成に関連して確認的因子分析をしなかった理由などの質問がなされ、それに対し適切に回答されている。また、重回帰分析で使用した独立変数に質的変数を用いていることに対する考えを問われ、今後は使用した質的変数を量的変数として測定できるような方法の工夫など、小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動をより効果的に促進するために、さらに関連要因の検討を深め明らかにしていきたいと課題が語られた。提出された副論文は、本論文に関連する内容であり研究プロセス、必要なデータ収集、分析手法が適切になされ、論旨も一貫している論文であると評価された。

以上のことより、本学位審査委員会は、提出された本論文が小児看護学の教授活動における実践・研究の発展に寄与する学術上価値ある論文であり、論文提出者である柴氏が看護専門領域における十分な学識と研究者としての能力を有するものであると確認をしたので、博士(看護学)の学位を授与するに値するものと全員一致で判断した。

